

ここは富水 すどう美術館の新しい活動の場
こんこんと水が湧くようにアートも溢れだす希望が湧いてくる
水はわたしたちになくってはならないもの「AQUA」が誕生する

初荷 新年号

2012年1月発行 25号 すどう美術館
〒250-0853 神奈川県小田原市堀之内 373
TEL.0465-36-0740 FAX.0465-36-0739
info@sudoh-art.com
http://www.sudoh-art.com

小田原とレジデンスの素敵な関係

小田原市文化政策課文化芸術担当課長 古矢智子

アーティスト・イン・レジデンスを小田原で…こんな須藤館長のご提案を受け、庁内プロジェクトを立ち上げたのは今年の夏。幸いにも南足柄市にご賛同いただき、すどう美術館と二市が協働して実行委員会を設置することで補助金の確保が可能となり、公共施設利用にかかる調整、近隣市町村への協力依頼などレジデンス開催にかかる実務面のお手伝いをさせていただきましたが、これは本市にとりましても、文化振興の意義とあり方を問う格好の機会となりました。

レジデンスの第一義は、アーティストの育成にあると思いますが、行政が関わるためには、誰もが納得する公共性を求められます。分かりやすいのは、レジデンスを機会として小田原に人が訪れるという誘客効果でしょうが、それだけを考えると、とても割りの合う事業とは言えないでしょう。

レジデンスの公共性とは、やはり「市民の心を動かす」という点にあると思います。「今、ここで」生まれるアート

は、世界観を広げてくれる大きな刺激となります。今回、ワークショップを実施した小学校からは、「絵を描くのが苦手な生徒が、楽しんで描いていた」という嬉しくなるような感想をいただきました。自分の見知っている素材、例えば小田原城や何気ない街角が、アーティストの手で料理され、作品となったことは、自分のまちの良さを再確認する好機ともなりました。

また、実行委員会の皆様の熱意は、他の活動団体をも巻き込んで、コラボレーション企画が実現したり、新たな出会いを呼び込んだりということもありました。こうしたエネルギーを生み出したこと、それが小田原にとって力とならないはずはありません。

そして、私は思い描きます。レジデンスに参加したアーティストが、いつまでもODAWARAに心を寄せてくれることを。そしてそれぞれの場所で、ODAWARAの話をしてくれることを。

小田原の文化の新しいページが、また開かれたことに乾杯☆

アーティストインレジデンスを終わって

すどう美術館館長須藤一郎
慌しかった十一月が過ぎました。十一月七日夕刻より、小田原市の加藤市長にご臨席をいただき、すどう美術館でオープニングのセレモニーを開催して始まった「西湘地区アーティストインレジデンス」は、十八日に小田原市の市民会館でアーティストに修了証書を授与し、修了パーティでつづがたく終了しました。

日本のアーティスト六名、それにアメリカ、イタリア、スペイン、オーストラリア(二名)、スロベニアからの海外六名のアーティストを迎え、行なったこのレジデンスは、予想を大きく上回るたいへんハードなプロジェクトでしたが、日本ではなかなか経験のできない、とても有意義なものであったと思っております。資金集めを始め、宿泊場所、食事場所、制作場所、そのあとの展示場所を探し、決定していく作業、期間中のスケジューリングの設定などもろの準備を一つ一つ進めて開催の日を待ちました。

大震災や原発問題を抱える不安な日本に予定どおり海外の六名が小田原に無事に着き、制作の期間は十二日、合計で千人ぐらいの方が立ち寄り、また、アーティストに分担いただき、お城の広場と小田原、南足柄の小学校三校で行なったワークショップは画期的なことだったと思います。参加した人たちの喜び、特に小学校では、子どもたちの目の輝き、楽しみな方など、一生忘れられないようなことになったのではないのでしょうか。



なお、海外六名のアーティストの皆さんが、日本の人たちの親切やもてなしのこころ、小田原とその周辺の風景や建物などに心から感激して帰ってくれたことが何よりもうれしかったです。

「レジデンス」が終わった後は、小田原の数寄屋造りの清閑亭で作品を展示しました。そこには三百人を超す人が見に来てくれ、和風の建物と現代美術の新しい試みでしたが、とても面白かったと評価をいただきました。

終了後は南足柄市の文化会館への巡回です。ここでは南足柄小学校で行なったワークショップの六メートル×四・五メートルの巨大な作品を四クラス分四点の展示も、圧巻でした。早速、参加した六年生がクラスごとに鑑賞にきてくれました。文化の向上、アーティストの支援、市民との交流等を指して、日本でも本格的なアーティストインレジデンスを行なうべきとの使命感から始めたことでしたが、NHK、フジテレビ、朝日新聞、その他地元のマスコミにも取り上げられ、多くの方々の共感をいただきました。問題点も改善点は多々ありましたが、これからは継続して開催していくことに意義があると考えています。新たな出発が始まっています。

点描

こんな話でよかったら (12) 仙仁司

アートをこよなく愛する市民の気持ちから出発した第一回西湘地区アーティストインレジデンスは話が持ち上がった当初から長い準備期間、開催期間の対応の一切が、関係市町村、協賛団体、お手伝いの方々との心遣いの行き届いた手造りの中で行われた。国内外から御参加いただいた12名のアーティストは、このような配慮と雰囲気を感じて、公開制作やワークショップに精一杯の仕事振りを見せていた。

公開制作では、手狭な環境と限られた短い制作時間の中で作品のテーマやモチーフ、画材や道具の話など見学者の質問に丁寧に答えながら、普段は見ることのできない制作現場での作家の意識や気持を伝え創造の不思議を惜し気もなく披瀝して現代美術の醍醐味をわかり易く解説するのに余念がなかった。

小学6年生を対象にしたワークショップでは、いつもと異なる体育館の様子に興奮気味になっている子供達の感性を刺激し、共に絵具まみれになって多勢の力を一つの巨大画面にまとめ子供達に一生の思い出になるような充足感を与えた手腕と説得は見事であった。

美術界は、価値判断の定まった過去の美術を優先し、現代美術と一線を画しているような観があるが、特にアーティストインレジデンスのような形ではまた別の面白味が満ち満ちている。同じ時間帯で呼吸し、眼を向け観察している現場には創造の軌跡が生暖かく、ハラハラドキドキの一体感を持たれた方も多かったと思うが、これこそアートの魅力に他ならない。

次回に向かって気が逸ってくるのは僕だけではないさそうだ。

